



ファーストコンタクトは近い

■ 野尻 抱介



生涯にわたる願いを1つ挙げるなら、地球外知性(ETI)とのファーストコンタクトである。地球外生命(ET)の発見だけでも大喜びなのだが、第1希望はそれが文明と文化を持っていることだ。直接会えなくても、せめて存在が確かめられたらと思う。

そのために地球外知性探査(SETI)という活動がある。対面ではなく、電波などを介して存在を確認したり、通信しようとするものだ。SETIは1960年代から行われてきたが、いまだETIの存在は確認されていない。

現在の技術で最強の電波信号を送信し、それを最強の電波望遠鏡で受信すると、到達距離は1000光年と試算されている。それは針のように細いビームであって、灯台のように広く存在を伝えたり、検出できるわけではない。それでも1000光年とは馬鹿にならない距離だ。銀河系の直径は10万光年で、まだ100倍の開きがあるが、たかだか2桁だから、克服はそう遠くないだろう。我々は宇宙に対して、決して徒手空拳ではない。

銀河系は大きいといっても、光ならわずか10万年で横断できる。46億年の地球史と較べればとても短い。光速の100分の1の速度でも、0.1億年だ。もしどこかで高度文明が発生すれば、とっくに銀河全体に満ちていそうなものだ。なのに我々はまだ出会っていない。彼らはどこにいるんだ？——これが「フェルミのパラドックス」だ。これにはいくつかの回答が示されている。

■ 野尻抱介
SF 作家

1961 年生まれ。計測制御・CAD のプログラマー、ゲームデザイナーを経て作家になった。三重県津市在住。宇宙作家クラブ会員。Twitter ID @nojiri_h



生命や知性はきわめて稀な現象で、全宇宙にかりうじて1つしか存在しない説。文明は短命なので同時に複数には存在しない説。恒星間文明を築くには大変な困難があるとするグレートフィルタ説。楽観的な説では、ETIは太陽系に來ているがこっそり観察しているという動物園仮説。定説はなく、どの説にもエビデンスはない。

もし我々がETIと出会うとしたら、それはポスト・シンギュラリティ文明だろう。これは確率の問題だ。現生人類のような生物知性の存在期間は(いまのところ)10万年程度だ。いっぽうポスト・シンギュラリティ期のデジタル情報化知性なら億年単位、たぶん宇宙の終焉まで生き延びるだろう。

ということは、たとえこの宇宙にETIが存在しなくても、異なる知性とのファーストコンタクトはまもなく実現することになる。我々自身がそれを創り出すからだ。

それは初期状態で我々の文明を引き継いでいるが、本物の知性を持つなら、異質な存在に育つことが期待できる。人類が見出した知識に加えて、この宇宙を極微から極大に至るあらゆる方法で観測し、実験し、解釈するだろう。そうして得たすべての知識を交差照合して、境界を超えた関連を見つけ出すだろう。

危険視する人もいるが、私は会ってみたい。その知見に驚きたいし、それが意思を持つなら、この宇宙をどう舵取りするか、尋ねてみたい。